A Portrait of a Country Artist- The Life and Work of C. F. Tunnicliffe (1901-79)

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2007-03-01
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 中野, 節子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/3390

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

ある田舎の画家の肖像

―― C. F. タニクリフ（Charles F. Tunnicliffe, 1901-79）の生涯と仕事 ――

中　野　節　子

北イングランド，チェシャー（Cheshire）の小さな農場に生まれ，のちに王立美術院（Royal Academy of Arts）の会員となり，「20 世紀最大の野生生物画家」（'the greatest wildlife artist of the 20th century'）といわれて，活躍した一人の画家がいる。あの木版画の大家 T. ビューイック（Thomas Bewick，1753-1828）の後継者とも目されていたこの画家は，鳥類を主とする自然動物の生態を描いた多くの木版画とともに，銅版画，水彩画の分野でも数々の傑作を残し，自作の本 6 冊，自然史や動植物の生態を扱った子ども向けの本 24 冊，39 人にものぼる作家や編集者との共同作品を手がけ，45 年余にわたる年月の間に 88 冊もの書物を残している。しかもそのうちのどれ一つとっても傑作との誉れが高い仕事であった。彼の仕事の根本には，自分の生まれ育ったチェシャーの自然の中での少年時代の生活と，1947 年から 1979 年の死にいたるまで 30 年間にわたって住みつづけた，第二の故郷ともいうべき，北ウェールズ，アングルシー（Anglesey）島での日々があった。数々の奨学金を得て学校教育を受け，自らの生きる道を築いていった，この田舎の画家の生涯と仕事をたどってみたい。

Ⅰ　その生涯

C. F. タニクリフ（Ckarles Frederick Tunnicliffe）は，1901 年 12 月 1 日，マクレスフィールド（Macclesfield）の町から 1 マイルほど離れた，チェシャーのラングレイ（Langley）の村に生まれている。父親は靴職人で，その仕事ぶりには定評があったが，チャールズが生まれて 18 ケ月後，健康上の理由から，空気のよい屋外での仕事を求めて，サットン（Sutton）のレイン・エンズ農場（Lane Ends Farm）に移り，農場をやり始めた。四人の子どものうちの唯一の男の子であったチャールズは，幼い頃から絵を描く才能を発揮する。農場の動物たちを熱心に観察し，新しく塗られたばかりの納屋の壁をキャンバスに見立てて，さまざまな動物たちの姿をいたずらがきして，父親に叱られたこともあったという。穏やかな東チェシャーの風物の中に位置していた小さな農場，それを取り巻く自然の風景，牧草地で草を食む家畜たち，隣接するダービシャー（Derbyshire）の景勝地，ピーク・ディストリクト（Peak District）から流れ込むボリン川（River Bollin）が，その地を豊かに潤していた。こんな風物が幼いチャールズの脳裏に刻み込まれた自然の風景である。しかし，農場の仕事は決して楽なものとはいえなかった。20 エーカーの農場の細々した作業は，主に体の弱い父親とこの息子の肩にかかっていたからである。朝早くから起きだし，牛の乳を絞り終えると，豚や鶏の餌をやるという，毎日の変わらぬ仕事が待っていた。そんな日常の仕事に加えて，夏には 4 時には起き出して，近所の人たちの援助を受けながら行われる干し草刈りの仕事もあった。こんなふうにして，やっと生計の道をたててゆくのに苦労していた両親，特に母親のマーガレットは，息子の絵

画の才能をなんとか育ててやりたいと応援していた。彼はやがて，村の学校から，地区の奨学金を得て，マクレスフィールド美術学校（Macclesfield School of Art）へと進む。1916 年，チャールズ 14 歳のときのことである。この決断にあたっては，サットン村の小学校長 B・モファット（Buckley Moffat）氏の応援も大きかったという。マクレスフィールドでは，当時美術学校の校長をしていた T. カートライト（Thomas Cartwright）氏が，この男の子の才能をすぐに認め，自らの母校ロンドンの王立美術学校（Royal College of Art）への進学を熱心に勧めた。一方，金曜日に開かれているマンチェスター美術学校での講座が終了すると，すぐさまチャールズは農場に戻り，遅くまで農場の仕事に精を出していたという。やがて彼は 1921 年，王立展覧会奨学金を獲得して，マンチェスター美術アカデミー（Manchester Art Academy of Fine Art）からロンドンの王立美術学校へ入学し，一年間に 80 ポンドの奨学金で，本格的に絵を学ぶことになる。最初のうちこそ，ひとり故郷の自然を離れての大都会の生活には，馴染めなかったようである。当時の心境を，タニクリフは「最初の学期は，恐ろしいまでの郷愁の思いで，ほとんど胸がつぶれそうだった」（‘That first month in London was a bad one : I was terribly homesick.’）と述べている。そんな息子のもとに，郷里の母から，手づくりのお菓子や農場の食品を詰め込んだ箱が届けられた。干し草刈りの季節には，刈り取られたばかりの新鮮な干草の小さな束が送られてきたともいう。ほどなく若者は，大都会ロンドンの用意する文化の香りの中で，生き生きと暮らすようになっていった。リージェント公園の中にある動物園や自然史博物館に足繁く通っては，鳥の生態を観察したり，ナショナル・ギャラリーの巨匠たちの名画を鑑賞したりする生活が始まった。特に好んだ画家は，ピエロ・デラ・フランチェスカ（Piero della Francesca），ピーター・ブリューゲル（Pieter Breughel），アルブレヒト・デューラ（Albrecht Durer），そしてジョン・コンスタブル（John Constable）であった。「リーズ・グループ」（‘Leeds group’）に属する友人たちとも親しく交わっている。その中には，ヘンリー・ムーア（Henry Moore），バーバラ・ヘップワース（Barbara Hepworth）等の顔も見られた。このような環境の中での本格的な専門技術の訓練，良き教師や友人たちに恵まれての修業の中で，目覚しい勢いでその腕を磨き，1923 年に卒業資格（diploma）を獲得し，つづいて最高位合格のご褒美である奨学金をも与えられ，もう 1 年銅版画の技法をロンドンで学ぶ特権をも得た。こうして，木版，銅版の製作等の技術をしっかりと習得することに加えて，水彩画の才能も開花させている。が，彼の専門とするところは，やはり自然界の生き物や風景であり，とくにロンドンでは鳥の観察画にその手腕を発揮している。当時 RCA の学長をつとめていたウィリアム・ローゼンシュタイン（William Rothenstein）は，土曜日に自宅で開かれる数々の集会に，積極的に学生たちを招き，アーノルド・ベネット（Arnold Bennet），T. E. ローレンス（Lawrence of Arabia），G. K. チェスタトン（G.K Chesterton）等の文化人との交流の機会を与えて，彼らの視野を広げる努力を惜しまなかった。同時に，マルコム・サラマン（Malcolm Salaman）などの画商たちに，学生たちの仕事を紹介したりして，彼らの将来への道を用意してくれていた。

しかしながら，RCA 時代のタニクリフにとって最大の収穫は，ウィニフレッド・ウォナコット（Winifred Wonnacot）との出会いであった。両親はもともとイングランド人であったが，タニクリフと同じく奨学金を得て，北アイルランドのベルファスト近郊からやってきていた同級生である。聡明で，美しく，数学の才能ももちあわせている陶芸専攻のこの女生徒は，一目で彼の心をとらえてしまった。のちに二人は結婚し，ウィニフレッドはその経理の才能を最大に活かして，画家の生活を助けるとともに，自然観察の旅行の道づれをつとめたりしながら，自らも美術の教師として働き，家計を支えている。

1928 年，ロンドンでの修行の時代を終え，タニクリフはウィニフレッドと共に故郷のチェシャー

に戻った。しかし，1925 年に父が亡くなっており，母と妹は，1927 年に，懐かしいレイン・エンズ・ファームを手放してしまっていた。ウィニフレッドと結婚したタニクリフは，マクレスフィールドに新居を構えることになる。その地で彼は，農場の製品を売るための宣伝に使う銅版画を制作する仕事をしたり，美術学校の講師をしたりして生計を立てている。戦争も終り，日常の生活が戻ってくる中で，家畜の飼料，種の包装，土壌改良薬剤の売込みを盛んにするようになった商業界は，製品売り込みのためのグラフィック・アートの必要性を認めるようになっていた。そんな生活に変化をもたらしたのは，H. ウイリアムソン（Henry Williamson）の『カワウソのターカ』（*Tarka the Otter*）との出会いである。この作品は，1928 年に，ホーソンデン文学賞（Hawthornden Prize）を獲得した動物物語であった。タニクリフがこの作品に挿絵をつける仕事を提案し，1932 年に，木版画の見事な挿絵入りの新版が出版されることによって，爆発的に売れるようになり，ウィリアムソンの自然物語作家としての名声は定着することになる。そしてまた，挿絵画家としてのタニクリフの評価も高まっていった。タニクリフのもとには，次々と挿絵の仕事が持ち込まれるようになった。そんななかでも，ダービシャー出身の女流作家 A. アトリー（Alison Uttley）の自然に基づく全作品（17 作）への挿絵の仕事は注目に値する。挿絵入りのアトリーの本は，多くの愛好者を獲得し，田舎生活の風物の魅力を如何なく発揮している。タニクリは毎年アトリーの本に挿絵を描き続け，ほとんど一年の 6 週間を，その仕事だけに費やすことになったのである。しかし，挿絵画家の仕事の出発点を作ったと思われるウィリアムソンとの共同作業は，必ずしも幸せなものとはいえなかった。すぐれた仕事はするが，真面目だけがとりえの，この融通の利かない田舎者の画家と，辛辣で，闘争的な無頼の作家の生きざまとは，所詮水と油のもののようだったからである。

やがてタニクリフは，1944 年，鳥類をはじめとするさまざまな生物観察画での数々の業績により，王立美術アカデミーの会員に加えられ，1954 年には，RA（Royal Academician）に推挙されている。1974 年 8 月からは，ロイヤル・アカデミーでの定期展覧会に，毎年 6 枚の絵画を制作し，いずれも即日完売の人気を得ている。同年，副会長をつとめていた王立鳥類保護協会から，その功績に対して金賞を授与される。1977 年の女王の名誉称号授与リストに挙げられて，OBE（Officer of the British Empire）の称号をも受けている。

1969 年，長らく連れ添った最愛の妻ウィニフレッドが亡くなった。その後は，妹ドロシー（Dorothy Downes）の世話を受けながら仕事を続けたタニクリフであったが，車の事故後に心臓を悪くしたり，持病の糖尿病で視力をなくすという不幸も重なって，1979 年 2 月，30 年間にわたって暮らしつづけたアングルシー島のマストライス（Malltraeth）で，その 75 年余りの生涯を終えている。

Ⅱ　その仕事

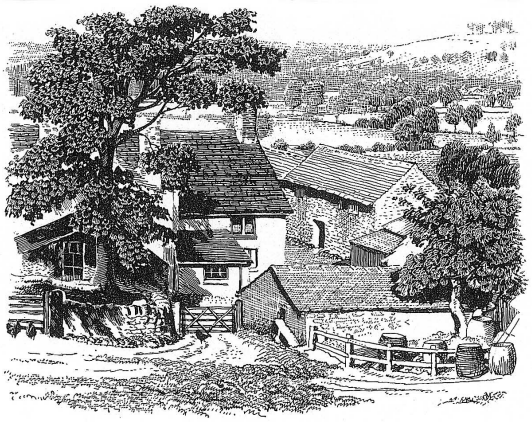
タニクリフの仕事全般を特徴づける独特の魅力は，その卓越した職人的技術が，田舎に生活する人だけが持つ徹底的な自然観察に裏打ちされた理解に支えられていることである。それはとりもなおさず，毎日たゆみなく続けらた，修練の賜物から生まれたものであった。

タニクリフは，どんな作家たちの仕事に従事するときも，何か特別な，神秘的ともいえるような感受性をもって，作家たちの空想の世界へ入ってゆくことができる人物であった。それこそまさに，偉大な挿絵画家の印とでもいうべきものである。

A　自身のテキストに絵をそえて

1)『私の田舎の本』(*My Country Book*, The Studio, 1942)

19歳まで暮したチェーシャーのリー・ファーム(Lee Farm)での生活を綴った，タニクリフの処女作ともいえる本である。その地での思い出の日々を，次のように述べている。



Lee Farm
－*My Country Book*(1942)

Untill I was nineteen years old I knew little of any other country than my own corner of east Cheshire. Farmwork was never-ending and prevented any holidays but those of a few hours duration. On Sunday mornings, when farm work finished early, it was my habit to climb the hills and to look upon this little domain of mine.(p. 29)

The Plain from the Lee Hills
－*My Country Book*(1942)

そんな日常生活の中で，自然への畏敬の念と小さなもの，取るに足りないような地味なものの中に潜む美しさを見つけようとする画家の姿勢が，次のような主張のなかに垣間見られる。

‥‥Nature is lavish with her riches for those who have eyes to see. Do not pass by those objects which are supposed to be ugly, for example, mud, ooze, sum on stagnant water, rotting leaves, fungi and dead wood. All have their beauty and significance.

The great and the small, both are equaly important, and a picture of mud and puddles can be as arresting as one of mountains and lochs.(p. 94)

16枚の色彩画と80枚のモノクロームの挿絵が入ったこの作品は，その後のタニクリフの仕事を予感させる，初々しく，温かなぬくもりを感じさせる本となっている。

Radnor Mere from the woods
－*Mereside Chronicle*(1948)

2)『水辺の日誌』(*Mereside Chronicle*, Country Life, 1948)

チェシャー出身のタニクリフは，この地方の沼や湖水を歩き回り，ボスレイ貯

水池(Bosley Reservoir)，ガウスワース・ホール（Gawsworth Hall)，レディスメアー（Redesmere）の睡蓮などを描き，水辺の風景や鳥たちの詳細なスケッチを残した。それらに加えて，妻ウィニフレッドと二人で逍遥した北の地方，サザランド（Sutherland）やスコットランドでのスケッチと地図をそえて出版したのがこの本である。

Gawsworth Old Hall Pool and Church
－*Mereside Chronicle*（1948）

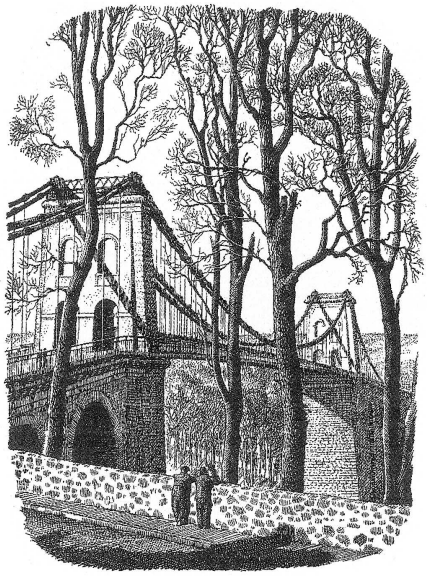
その様子を「序文」のなかで，次のように記している。

In my search for and study of birds the meres, pools and reservoirs of east and mid-Cheshire have, for many years, been favourite hunting grounds. The waters themselves are almost exception, set in the midst of beautiful country, and, on those rare occasions, when birds failed to appear, there was always the ever-changing scene with the gleaming water to satisfy the eye, so that the drawing and painting of landscape was inevitable, and inseparable from the drawing of birds.

こうして，ページ大の挿絵1枚，207枚の墨絵と6枚の湖水地図をそえた，モノクロームの淡い色調の本が出来上がった。水辺の風物の魅力，そこに集まってくる鳥たちのさまざまな生態が見事に捕らえられている。なによりも，背景を重要視して生物を描くことの大切さを身上とした画家の手腕が，遺憾なく発揮されているところが注目に値する。とくに水のみせるさまざまな表情をこよなく愛した，水辺の風物画家タニクリフの誕生を髣髴とさせる画期的な作品である。

3)『入り江の鳥たち』(*Birds of the Estuary*, Penguin Books, 1952)

のちに，ウェールズのアングルシー島の海辺の家にすみ，朝に夕に，目の前の入り江に集う鳥たちの生態を飽かず観察して暮らすようになる，画家の将来を予感させるような，小型な版ではあるが，愛らしい本である。16枚の色彩画と16枚のモノクローム画が入れられている。



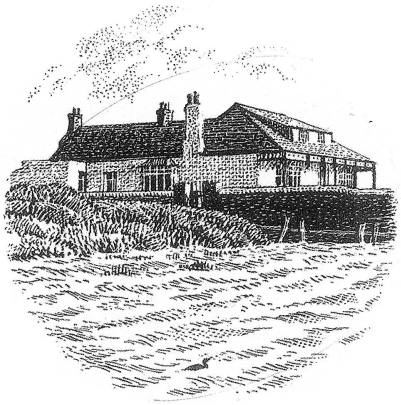
Gateway to Anglesey
－*Shorelands Summer Diary*（1952）

4)『ショアランズ夏日記』(*Shorelands Summer Diary*, Collins, 1952)

1947年から30年間にわたって住みつづけ，朝に夕に，その風物のなかに浸って創作活動をおこなう，タニクリフの第二の故郷というべき

地が，北ウェールズ，アングルシー島の南西にある海辺の小さな村マストライス（Malltraeth）であった。入り江に建つ一軒の平屋の家「ショアランズ」（'Shorelands'）とタニクリフの出会いは，まさに運命的ともいえるようなものである。何度かの取材旅行で訪れていたアングルシーではあったが，ある日のことウェールズの友人に連れられて，この水辺の家を最初に訪れたタニクリフは，そのただすまいをひと目で気に入り，将来もしその家が売り出されるようなことがあったら，自分が手に入れたいと頼んだのである。それから間もなくしてこの家は売りに出され，夢は現実のものとなった。

序文には，夫妻がこの家に引っ越してきた日のことが，生き生きと綴られている。



Shorelands
－*Shorelands Summer Diary*（1952）

On the evening of March the 27th, my wife and I crossed over Telford's great bridge which spans the Menai Straits, and entered the island county Anglesey. We were no strangers to this fair country, but our journey to-day was different from all previous ones for, at the end of it, in a little grey village at the head of an estuary there was an empty house which we hoped to call home as soon as we could get our belongings into it. Our other visits had been short hoidays, spent chiefly in watching and drawing birds and landscape of which there was great variety. Several sketch-books had been filled with studies of Anglesey and its birds, and we had been specially delighted to find that the island in spring and autumn was a calling place for many migratory birds, while summer and winter had their own particular and different species. Occasionally, to add to the excitement, a rarity would appear. Whatever the season there were always birds and this fact had greatly influenced us in our choice of a new home.

しかし新しい家ショアランズに入るときには，ちょっとした抵抗もあった。入り江のすぐ近くにあるこの家に至る道はたいへん細く，しかも角にある小さな古い教会と隣家の庭壁の間は極端に狭くなっていて，家具や台所道具等の家財道具一式を積み込んだ引越しの車は入ることができず，結局，最後には，アングルシー島村役場から提供された石炭運搬用のトロッコで運び入れねばならなかったからである。

こんなエピソードで始まった生活ではあったが，やっと自分の家という理想の場所を手に入れたタニクリフは，次の日からは，朝に夕に変化する水辺の風景，舞い降りてくるさまざまな鳥の生態を観察しながらの充実した，幸せな生活を始めている。夫妻はこの地での生活を心から楽しみ，制作活動に打ち込んだ。そこにはこの画家が望んだ全ての風物―農場の風景，遠くの山並み，海の絶壁，鳥たちが逍遥する渚や海藻―が存在していたからである。

この地での最初の成果ともいうべき『夏日記』は，1947 年 4 月から 9 月までのショアランズでの生活の様を綴ったもので，16 枚の色彩画と 185 枚のスクレイパーボードという手法を使った挿絵からなっている。その後盛んに用いることになった，このスクレイパーボードといわれる白黒の線画の手法は，厚紙に白粘土を塗り，その上に黒インクの膜をかぶせた

画板を特殊な道具で引っかいて描くというもので，彼の仕事を決定づける画期的な手法となった。その見事な挿絵に加えて，生まれながらの作家のものともいえる，繊細で，温かな魅力を持つ文章が一体となって，見事な作品に仕上がっている。

至福の一日の終わり，灰色の石の垣根や農場が点在し，なだらかなうねりを見せるアングルシーの田園風景，カナーヴオンの方角に広がるようにして連なるスノードン山脈を眺めながら，夕日の影がしだいに濃くなる夕焼けの中，家路へつながる道を，車で帰ってきたときのことを，タニクリフは次のように綴る。

In the deepening twilight we reached home and, before going indoors, gazed down the length of the estuary. We still find it difficult to believe that we really live and work in this place so close to the birds and the sea. However, there they were, the great white drifts of gulls just discernible on the darkening sands, the calling of unseen Curlew, and the distant roar of the breakers at the bar.

Low over the house a formation of belated gulls passed, their white undersides catching the last of the afterglow, and as they disappeared in the dusk we unlocked the door and lit the lamps, feeling well content. (p. 148)

この『日記』は，2 ギニー（現在の 30 ポンドにあたる）の値をつけられて販売された。しかし，当時としてはこの値段は少々高価で，その大部分が売れ残ってしまい，最後には定価を下げて売りさばかなければならないという結果に終わってしまった。しかし今ではこの本は，タニクリフの最高の仕事と目されていて，収集家の人気を独占する書物となっている。すでに原稿はできていたにもかかわらず，これに続く第二作目が出版にいたらなかったのは，この種の本への要求がまだ十分に熟していないと出版社が判断したのに加えて，タニクリフ本人が，次巻においても同様に，豪華な色彩画をふんだんに使って，第一級の本にすることを主張し，値段の点でも，彼らと折り合いがつかなかったためらしい。そんなこともあって，結局この本の続編は，タニクリフのなくなったあとで出版されることになる。

『ショアランズ冬日記』（*Shorelands Winter Diary*，1992）は，タニクリフの死後，アングルシーのスァンゲヴニ博物館（Oriel Ynys Môn）所蔵の文書のなかに残されていたタニクリフ自身の文とスケッチをもとに，有名な鳥類画家ロバート・ギルモア（Robert Gillmor）氏によって編纂出版された。タニクリフ生前の名著『ショアランズ夏日記』のあとを次ぐ書物として貴重な一冊であり，同じマストライスの村での，10 月から 3 月までの記録が綴られている。

もう一冊の本，『鳥のスケッチブック』（*A Sketchbook of Bird*）が，友人のイアン・ニアル（Ian Niall）の努力によって，タニクリフの 17 冊にものぼるスケッチブックから選ばれた 123 枚の鳥の色彩画を掲載して出版されることになっていた。しかしこの本も，実際に出来上がったのはタニクリフの死後となってしまった。1979 年，ゴランクツ（Golancz）社からニアルの序文がつけられて出版されている。

B　シドニー・ロジャーソン（Sydony Rogerson）との競作で

1)『私たちの鳥の本』（*Our Bird Book*, Collins, 1947）

タニクリフの甥にあたる，シドニー・ロジャーソンと共同の仕事は，この本に始まった。その経緯をロジャーソンは，妻ジェーンに宛てた献辞のなかで，次のように説明している。

･･･Then I talked to uncle Charles, and he said if I would write a book he would do the pictures. So together we have made this book for you, for your friends, and for all who already love birds, or who would soon love them if they knew what interesting, delightful and beautiful people they are.

31 枚の色彩画のページと 84 のスクレイパーボードの挿絵をつけられたこの本は，愛情あふれる，きわめて美しい本に仕上げられている。

2)『道の両側で』(*Both Sides of the Road*, Collins，1949)

ページ一枚分の大判彩色画 16 枚と 107 枚の白黒のビネット風の挿絵をつけたこの本は，画家と作家の協力でできたもう一つの傑作である。

叔父と甥の関係にあったロジャーソンとタニクリフは，共に田舎の風物にどっぷりとつかって暮し，農場の営みを細部にわたって体験し，その苦労と喜びを体感していた。そんな彼らの田舎の生活に寄せる熱い思いが，読者を魅了する農場の動物たちの生態とともに見事に綴られ，「タイムズ文芸書評誌」(‘ Times Literary Supplement’) は，次のように絶賛している。

“Mr. Rogerson and Mr. Tunnicliffe have produced a book which should enhance the townsman’s respect for the countryman and his pride in his native soil. It is both a treatise and a picture gallery. Mr Tunnicliffe’s paintings and drawings have the same measure of clarity and relevance as has text.”

C　若い画学生向けの指導書を書いて

タニクリフまた，後進の画学生と絵を描くよろこびを学びたいと思っている初心者のための見事な指導書をいくつか書いている。

1)『鳥の肖像画』(*Bird Portraiture*, The Studio, 1945)

この本の序文は，これらの指導書が，具体的な技術を教えるとともに，若いタニクリフが目指していたのが，新しく独特な美の創造であったこと知るうえでも興味ふかい。

･･･, not because it has slavishly imitated the form and colour of the bird, but because it has used the bird and controlled it to create a new beauty. (‘Introduction’)

2)『農場の動物の描き方』(*How to Draw Farm Animals*, The Studio, 1947)

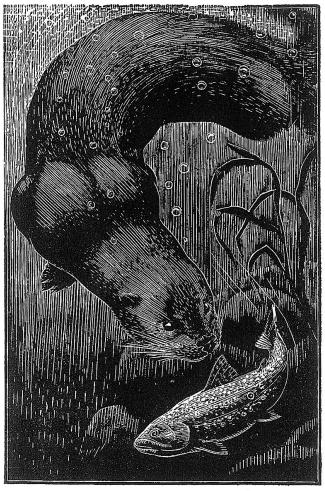
農場の動物の観察をすることから，自らの画業修行を始めたタニクリフの面目躍如といった，生き生きとした具体的な助言に満ちたすぐれた指導書となっている。

D　自然物語作家たちの作品に挿絵を描いて

Ⅰ）　H. ウィリアムソン（Henry Williamoson）との仕事

1)『カワウソのターカ』(*Tarka the Otter*, G.P. Putnam's Sons, 1932).

デヴォンシャーの川を舞台に，カワウソのターカの一生を綴ったH・ウィリアムソン（Henry Williamson, 1895-1977）の，『カワウソのターカ』につけた木版の挿絵によって，タニクリフの挿絵画家としての名声は一気に高まった。しかしながらジャーナリスト出身の，この激しい気性と常識破りの生き方を貫いた作家と，田舎育ちの素朴な若者タニクリフとの関係は決して調和にあふれたものとはいえなかった。何よりも金銭に異常に執着する吝嗇な作家と公平を欠いた出版社によって，駆け出しの若い画家タニクリフが散々な目にあったことは事実である。しかしながら，タニクリフの挿絵をつけたこの新版によって本は爆発的に売れ，自然の物語の作家ウィリアムソンの名が定着するのである。画家の手にしたのは，まさにすずめの涙のような報酬と，作家の課す詳細な実地踏査の要求，精緻を極める膨大な仕事を短期間で仕上げるという日々であった。この仕事をこなしたために，タニクリフはすっかり目を痛めてしまったという不幸な落とし前もついている。一方で，この過酷な要求に応えたことによって，挿絵画家としてのタニクリフ自身の名声が確立したにとどまらず，その技量も格段の進歩をとげたことも否めない。



－*Tarka the Otter*（1932）
by Henry Williamson

物語は，「小さな水の放浪者」という意味を持つ，ターカ（Tarka）という名の雄のカワウソが，川辺の巣穴に，生まれるところから始まっている。母オーリー・ホルト（Owley Holt）の最初の子どもで，彼の下には二匹の妹たちがいた。タウ（Taw）とトリッジ（Torridge）という二つの川を舞台に，冒険を試み，恋をし，結婚をして，カワウソは成長していく。しかし最後には，以前母親をも傷つけた，一家の宿敵ともいえる猟犬デッドロック（Deadlock）に追い詰められ，犬もろとも死んでゆくという物語となっている。

タニクリフ同様，水辺の風物を描くことに独特の技能を発揮していたウィリアムソンの物語の魅力を，1932年版につけられた序文の言葉が的確に捕らえている。

The spirit of Dartmoor and Exmoor is, above all, the spirit of the water, and to Mr.Williamson, it is a spirit so familiar as to have become a part of himself. He loves the air, as witness his pictures of raven and peregrine and other birds. He loves the earth, as testify his studies of fitch and fox and badger. But above all he loves the water － fresh, brackish, salt ; mist, rain, snow, ice － he follows it lovingly in all its forms. For him, I think, as for some others of us the Spirit of God still moves, as before the creation, upon the face of the waters.

ターカと彼の宿敵であるデッドロックとの最後の対決で，物語りは締めくくられる。

･･･They saw the broken head look up beside Deadlock, heard the cry of *lc-yang*! as Tarka

bit his throat, and then the hound was sinking with the otter into the deep water. Oak-leaves, black and rotting in the mud of unseen bed, arose and swairled and sank again. And the tide slowed still, and began to move back, and they waited and watched, until the body of Deadlock arose, drowned and heavy, and floated away amidist the froth on the water.

They pulled the body out of the river and carried it to the bank, laying it on the grass, and looking down at the dead hound in sad wonder. And while they stood there silently, a great bubble rose out of the depths, and broke, and as they watched, another bubble shook to the surface, and broke ; and there was a third bubble in the sea-going waters, and nothing more. (pp. 278-9)

'Huntsman, Bite'm, and Tarka at the Spady Gut.'
－*Tarka the Otter*（1932）

この最後のページに添えられているタニクリフの絵は，それまでの精緻きわめる木版画の挿絵ではなく，砂浜に打ち寄せられて仰向けに空をあおぐ，ターカの骸の上に舞う一羽のかもめという線画のみである。見事に連帯を組んだ，人間と猟犬の一団の執拗な追跡の前に敗れ去ってゆく，一匹の野性の動物の最後が暗示的に描かれている。

ウィリアムソンとの共同作業による作品は，この「ターカ」を最初に，1936 年の鮭の「サラ」の物語にいたるまで，プットナム社とフェイバー社から，矢継ぎ早に出版され，全 6 作となった。

2）『孤独なツバメたち』（*The Lone Swallows*, 1933）
3）『老いたシカ』（*The Old Stag*, 1933）
4）『スター・ボーン』（*The Star Born*, 1933）（Faber & Faber）
5）『ペリグリンのサガ』（*The Peregrine's Saga*, 1934）
6）『鮭のサラ』（*Salar the Salmon*, 1936）（Faber & Faber）

情緒的な表現を抑えて，事実のみを淡々と描写してゆくウィリアムソンの筆致は，イギリスの自然物語の特徴を見事に備えた文体であり，この分野の読者たちに十分に訴えかける魅力を持っている。人間と野生の動物たちとの関係を，これもまたイギリスの田園生活に欠かすことのできない狩，魚釣りという，有産階級の人々の余暇の過し方との関連で捉えているところもその特徴の一つである。しかしながら，もともとチェシャーの庶民の息子に過ぎないタニクリフと，常に居丈高に自分の主張を押しつける作者との間で，微妙な軋轢が生じていたことは容易に想像できる。ウィリアムソンの要請で，狩や，有産階級の余暇の一つである釣のさまなどを，現地に赴きつぶさに観察しているうちに画家の心に芽生えた懐疑もあったにちがいない。タニクリフは終生，人間の慰みにつき合わされる動物たちの悲劇に，深く心を痛めていた田舎の生活者であったからである。ロマンチックなものを求め始めた，知的

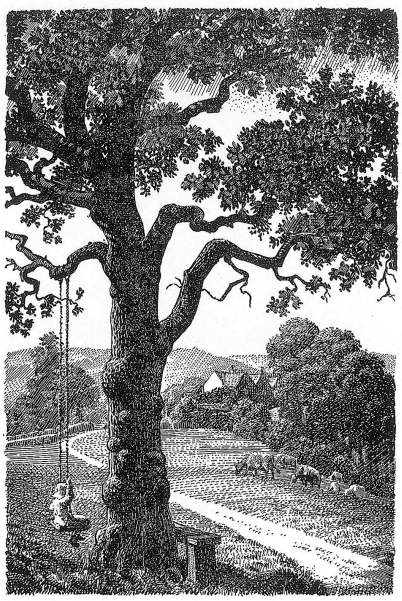
な作業を重視するこの作家との距離は，しだいに相反するものになり，4年間にわたる共同作業は終る。

Ⅱ） A. アトリー（Alison Uttley）との仕事

ウィリアムソンとの仕事を皮切りに始まった，タニクリフと他の作家たちとの共同の仕事は，まことに多岐にわたり，およそ40年を越える年月にわたる仕事のなかで，39人の作者や編者の88冊もの作品に挿絵を書き続けている。

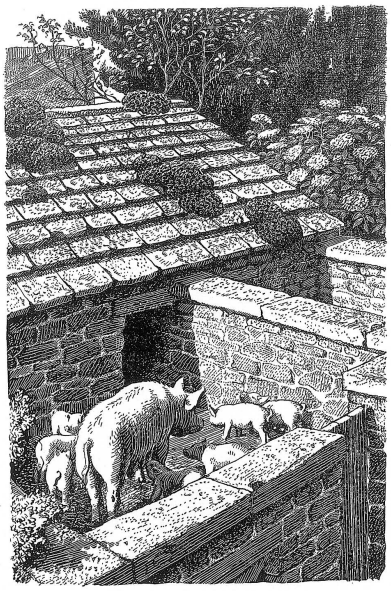
しかしながら，共に田舎の背景に育った作家A. アトリー（Alison Uttley, 1884-1976）との，17冊にものぼる仕事は画期的なものであった。もともと自分の作品に挿絵をつけることを好まず，挿絵画家たちに厳しい注文をつけ続けたアトリーであったが，タニクリフのそれにはすっかり満足して，自然の風物を扱った全ての作品に，彼の挿絵を望み，フェイバー（Faber & Faber）社から，以下の17冊の本が出版されている。

1）『田舎の宝もの』（*Country Hoard*, 1943）
2）『田舎の子ども』（*Country Child*, 1945）（New Edition）
3）『田舎の事がら』（*Country Things*, 1946）
4）『荷車と燭台』（*Carts and Candlesticks*, 1948）
5）『丘の上の農場』（*The Farm on the Hill*, 1949）（New Edition）
6）『幼い日々の待ちぶせ』（*Ambush of Young Days*, 1951）（New Edition）
7）『農夫の時計』（*Plowmen's Clock*, 1952）
8）『ここに新しい日がある』（*Here's a New Day*, 1956）
9）『田舎の1年』（*A Year in the Country*, 1957）
10）『白鳥が飛んでいく』（*The Swans Fly Over*, 1959）
11）『何でもない何か』（*Something for Nothing*, 1960）
12）『野性の蜂蜜』（*Wild Honey*, 1962）
13）『6月のカッコウ』（*Cuckoo in June*, 1964）
14）『1ペックの金』（*A Peck of Gold*, 1966）
15）『ボタン・ボックス』（*The Button-Box*, 1968）
16）『10時の学者』（*Ten O'Clock Scholar*, 1970）
17）『秘密の場所』（*Secret Places*, 1972）



－*Ambush of Young Days*（1951）
by Alison Uttley

この二人の作家と画家，アトリーとタニクリフは共に田舎に生まれ，幼年時代を田舎で過した庶民であった。アトリーの故郷は，18世紀後半，あのR. アークライト（Richard Arkwright）氏によって一躍世界の表舞台に立つこととなった綿紡績工場の村クロムフォード（Cromford）であるし，タニクリフの生まれ育った村の近くのマクレスフィールド（Macclesfield）は，絹の紡績で栄えた町であった。しかしながら二人が生涯こだわり続けたのは，このような社会の大きな変動とは全く無縁な，むしろ歴史の流れに逆らうかのような自然のなかでの活動であったといってもよい。一人は文字の中



－*Ambush of Young Days*（1951）
by Alison Uttley

に，他の一人は絵の中に，彼らが日夜観察していた，自然界の変わらぬ営みを留めようとしているからである。

アトリーがタニクリフの仕事をはじめて意識することとなったのは，1929 年の終わり頃，マンチェスターで開かれた，マンチェスター大学時代の恩師 S．アレクサンダー教授（Samuel Alexander）主宰の美術と工芸の展覧会の開会式に参加したときのことであったという。そのときはじめてタニクリフの絵を目にしたアトリーは，大いに感激している。そんなこともあって，それまでは本の挿絵というものを嫌っていたアトリーが，1942 年，フェイバー社が，彼女の本の挿絵をタニクリフに依頼したいと申し出ると，すんなり賛成している。タニクリフという画家の完成された技術と誠実な仕事ぶりを高く評価していたからである。このようにして開始された二人の共同作業は，以後 30 年にわたって絶え間なく継続され，互いにその力を認め合う専門家同士として，すぐれた成果をあげている。しかし，もともと気難しく，人との接触をなるべく避けていた感のあるアトリーは，タニクリフが事前の前触れもなく，ビーコンズフィールドの自宅を訪問したときなどには，居留守を使って会おうとはしなかったという挿話も残されている。しかしこの画家との関係は穏やかで調和のとれたものであり続け，アトリーは，タニクリフの「まるで心から楽しんでくれているように，私の物語のなかに入り込んでくる想像力」（‘at his imaginative way of entering my stories as if he really enjoyed them’ － ‘ Diary’, 10 March 1962）を高く評価している。彼女はまた，1951 年 1 月には，画商から手に入れた二枚の D．コックス（David Cox）の絵のなかの一枚を，遺言によってタニクリフに贈ることを決めていた。実際，彼女の死後，この絵は「その見事な仕事への感謝を込めて」という言葉が添えられて，タニクリフに遺されたのであった。

何の変哲もないように，淡々と田舎の風物，幼い日々を過したダービシャーのクロムフォード周辺という特定の田舎の風物を描いてゆく作品に，こんなにも長い間，新鮮な感動を込めた挿絵をつけ続けることは，そう簡単なことではない。しかし，二人の芸術家の驚異的な共同作業は見事に成し遂げられている。しかも不思議なことは，両者ともに，この仕事をしていたときは，すでに自分たちの故郷を離れ，アトリーはロンドン近くのビーコンズフィールドのペンの村に，一方タニクリフはウェールズ北西のアングルシー島の小さな村マストライスの浜辺に住んでいて，二人にとってすでにこれらの故郷の自然は，子ども時代の思い出の中にしかなかったという事実である。しかし画家タニクリフはアトリーの綴る文章の中に，彼の想像力を一杯に解き放ち，まるで水をえた魚のように，生き生きと仕事している。作家と画家，両者ともに，思い出の中にだけ現存している農場の建て物や裏庭で，自分たちのかけがえのない子ども時代を取り戻し，その中で再び生きているように思われる。その結果生まれた作品には，疑いなく，読む人たちをも幸せにする魅力がある。まさに，あのギルバート（Sir William Gilbert, 1836-1911）にはサリヴァン（Arthur Sullivan, 1842-1900）がいたように，アトリーにはタニクリフだったことがわかる。そしてまた古い田舎での生活と民芸品をこよなく愛する者たちにとっては，この作家と画家の絶妙な組み合わせは，もはやイングランドの伝統の一部といっても過言ではない。

アトリーの代表作の一つといえる「グレイ・ラビット物語」（‘Little Grey Rabbit’s Series’）のほ

とんどの作品に，愛らしい動物たちの姿を描いた挿絵を添え，その評価を確定した功労者ともいうべきマーガレット・テンペスト（Margaret Tempest, 1892-1982）との生涯にわたった不和の様子は，語り草になっている。テンペストはロンドン近郊サフォークのイプスウィッチの豊かな家庭に生まれ，病弱で正規の学校生活は続けられなかったものの，イプスウィッチとロンドンのウェストミンスターの美術学校で絵を学び，友人と協力して1919年には，チェルシー挿絵画家クラブ（Chelsea Illustrators Club, 1919-39）を設立し，盛んに活躍していた画家であった。アトリーの出版社ハイネマンが，この画家との仕事を提案してきたとき，先に仕事をして名声を確立していたテンペストの報酬は，当然高く見積もられていた。それが誇り高きアトリーにとっては大きな屈辱であったらしい。折に触れて，二人は衝突を繰り返し，生涯そのわだかまりは消えることがなかった。しかしそこにはもう一つの大きな問題もあったと推測される。田舎の貧しい自営農家に生まれ，奨学金の援助のみに頼って自分の道を確立したアトリーと，女王の従兄弟にあたるエルフィンストーンズ（Elphinstobes）家の子どもたちをはじめとする上流階級の人々に絵を教え，その後自らも貴族と結婚しているテンペストとの環境の違いからくる，違和感のようなものも否定できないからである。こんな構図も，タニクリフと彼の仕事の出発を大いに助けた，あのH・ウィリアムソンとの軋轢を想像させるところであろう。テンペストもウィリアムソンも理解できない，田舎者の素質を共有した作家と画家との協力態勢が，独特の作品世界の魅力を生み出していることは事実である。

「賞賛すべき著名な好奇心と過去と現在の鏡の貯蔵庫」（‘celebrated repository of curiosities and looking-glass of past and present’）という長い副題をつけて，L. ラッセル（Leonard Russell）が編集していた年刊誌「サタデイ・ブック」（‘Saturday Book’）にも，二人の共同作品が掲載されている。「バッキンナムシャーの花々」（‘Flowers in Buckinghamshire’）（1949）と，「田舎の食べもの：ある思い出」（‘Country Food : A Memory’）（1950），そして「木々の個性」（‘The Personality of Trees’）（1951）などである。いずれも生き生きと，田舎の風物の魅力を伝えてあますところがない。

アトリーは彼女の自然のエッセイ集『何でもない何か』の中で，次のように述べる。

Something for nothing was an everyday experience, a secret we could not share except with those of like temperament and feeling. All these made up a treasure of country life, for it is not the value but the hunting for them, peering in hedge and ditch and seeing a thorn and things that are important and beautiful. Nowhere is one alone, for always for company there are birds and animals and insects, invisible and present. One gets a sensibility to the earth, an awareness of rock and blade of grass, and an infinite pleasure in them.（p. 34）

まさにこの二人の田舎の芸術家，アトリーとタニクリフに共通の才能は，自然の中の何でもない小さなものの中に，かけがえのない生命のきらめきを見つけることのできる，田舎の生活者だけがもつ洞察力であった。

イアン・ニール（Ian Neal）は，タニクリフとアトリーに共通する「子ども性」（‘childlikeness’）のようなものをとりあげて，二人の共同作業が稀に見るような成功を収めている秘密を，次のように説明している。

The long collaboration with Alison Uttley was especially successful, as anyone who has read her

work will have discovered. There is something of the wondering dreaming child deep inside even the most sophisticated individual, and Alison Uttley' s gift was to be able to reach through to this. Charles Tunnicliffe, although he had no children of his own, knew what would please a child, whether it was those workaday houses enjoying their Sunday rest in the shade, someone digging up a Christmas tree, the milk being brought in, or the hay being gathered. In his approach, too, he seemed to have a particular insight, not only into the mind of his author, but those of her readers as well.（p. 131）（*Tunnicliffe's Countryside*, 1983）

タニクリフは，ウィリアムソンやアトリーという作家のほかにも，要請があれば，挿絵を描く仕事を手がけている。たとえば，『長い旅』(*The Long Flight* by Terence Horsley, Country Life, 1947）という本は，自然の強大な力に対抗して行なわれる灰色ガンやカモなどの渡り，川を遡って故郷の水の中で最後の繁殖の仕事を終えるサケ等の生き物たちの移動，そして人間の北極横断飛行士の仕事などを感動的に語るドキュメンタリー風の作品である。作者ホースレイはその序文で，次のように語る。

Each of these in their turn are the heroes and heroines of my stories. They posses the qualities of which the creatures of our planet cannot have too much - courage, tenacity, and knowledge of the flickle Godess whom we know as Nature.

タニクリフは，この作品に，黄褐色の地に線画で描いた，たっぷり一枚分の 18 枚の挿絵をつけている。作家のいわんとしたことを，その絵で補強すると評価された，名挿絵画家の面目躍如といった仕事である。この作家はその後，グライダー事故で，惜しくも生命を落としている。

その他にも，R. ロックリー（Ronald Lockley）という特異な作家の作品に，タニクリフは精緻で，魅力のある挿絵をつけている。なかでも大西洋に浮かぶ，岩だらけの孤島スコクホルム（Skokholm）の自然に魅せられ，その島に 13 年間にもわたって住み続けたこの作家が，戦地に赴いている義兄に宛てた手紙をまとめた『スコクホルムからの手紙』（*Letters from Skokholum*, 1947）には，タニクリフのスクレイパーボードの最高傑作と目される 50 枚の挿絵が添えられている。ロックリーはまた，野鳥の観察や島の自然の営みの変化を克明に綴った『島』（*The Island*, 1969），その島に暮すカナリアのキテイを主人公にしたお話『シナモン色の鳥』（*The Cinnamon Bird*, 1948）等の作品を発表している。のちに生涯の地と定めたウェールズの，マナーハウスの周囲に広がる自然とそこに暮す人間たちの物語『オリエルトン』（*Orielton*, 1977）に添えられたタニクリフの挿画は秀逸で，特に動物の姿をとらえたものが魅力的である。

E　若い人向けの自然教育に関する著作への協力

タニクリフは，さまざまな団体からの依頼にこたえて，若い人々向けの自然教育のための本に，すぐれた挿絵をつける仕事をしている。たとえば，オックスフォード大学出版局と「若い農場経営者クラブ全国連合会」（'National Federation of Young Farmers' Club'）からの依頼によって書かれた，F. ダーリング（Fraser Darling）の『農場の動物たちの世話』（*The Care of Farm Animals*, 1944）などは，自らが経験してきた農場の生活と動物たちのきめ細かな交流からうまれた，生き生きとした挿絵が魅力を発揮している。そんな仕事の中から代表作を挙げてみよう。

Ⅰ） G. ワトソン（Grant Watson）との仕事

正確な情報と確かな技法を買われて，タニクリフの仕事はどんどん増えていった。その一つに，G. ワトソン（Grant Watson）との共同出版がある。すぐれた自然科学者でもあり，詩人的センスをも持ち合わせていたワトソンは，子どもたちに対する啓蒙の仕事を盛んに展開していた。

1)『豊富な自然』（*Nature Abounding*, Faber & Faber, 1941）

大地，空，水，火という四部構成で，それぞれにまつわる作品の中からの抜粋を編集した本。それぞれのタイトルページに，タニクリフの見事なスクレイパーボードの挿絵が添えられている。

2)『空想と共に歩く』（*Walking with Fancy*，Country Life, 1943）

第一部「平和の家」と第二部「活動の家」という二部構成からなっている。タニクリフの挿絵が生き生きと美しい。

3)『役に立つ不思議』（*Profitable Wonders*, Country Life, 1949）

色彩と形，小さいことと大きいこと，空の渡りと水の渡り，擬態，塵といった科学的な世界におけるさまざまな不思議な現象を，分かりやすく，詩的な表現で説明するグラントの文章に，タニクリフが 4 枚の 1 ページ大の挿絵と 44 枚のスクレイパーボードの挿絵を添えている。

4）季節の移ろいの中に見つけられる，さまざまな自然の風物の魅力を語る本がシリーズとして作られている。

1 『冬に見つけるもの』（*What to Look for in Winter*, Willis & Hepworth, 959）
2 『夏に見つけるもの』（*What to Look for in Summer*, Willis & Hepworth, 1960）
3 『秋に見つけるもの』（*What to Look for in Autumn*, Willis & Hepworth, 1960）
4 『春に見つけるもの』（*What to Look for in Spring*, Willis & Hepworth, 1961）

戸外にでた子どもたちが，自然の中で目にするさまざまな発見が四季の変化の中にとらえられており，タニクリフの色彩を施した挿絵が楽しい。

Ⅱ）ノーマン・エリソン（Norman Ellison）との仕事

少年ディックが，放浪癖のある自然人の叔父ノーマドと共に，自然の魅力を追って冒険を繰り広げる話を綴ったのが，ロンドン大学出版局（University of London Press）から発行された，BBC の人気ブロードキャスター，「子どもの時間」に登場するノーマン・エリソン（Norman Ellison）の「ノーマド・シリーズ」である。

1）『ノーマドと歩く』（*Wandering with Nomad*, 1946）
2）『ノーマドと戸外へ』（*Out of Doors with Nomad*, 1947）
3）『ノーマドと丘を越えて』（*Over the Hills with Nomad*, 1948）
4）『ノーマドと放浪へ』（*Roving with Nomad*, 1949）
5）『ノーマドと冒険へ』（*Adventuring with Nomad*, 1950）
6）『ノーマドと北へ向かう』（*Northwards with Nomad*, 1951）

全部で 6 冊が出版されており，いずれもタニクリフのスクレイパーボードの挿絵が添えられ，子どもたちの興味をひきつける，面白くてためになる本に仕上がっている。

Ⅲ） イアン・ニール（Ian Niall）との仕事

後に，タニクリフの一生とその仕事を総括する本，『ある田舎の芸術家の肖像』（*Portrait of a Country Artist*, 1980）を書いたニールも，この画家と共同でよい仕事を残している。

「私は生来の狩人の本能をもっていた。銃と火薬の匂いよりも，私を魅了したものはなかった」（'I have born with hunter's inttinct. Nothing had fascinated me more than guns, the smell of powder,...'）と語る，熱心な鳥撃ちでもあったニールとタニクリフの自然に対する姿勢は，考えようによれば，きわめて対照的であるといってもよい。他の博物画家たちがするように，撃ち落された鳥たちの骸を正確に計測することによって仕事をすることよりも，実際に自らの足と目を使って，生きて活動する鳥たちを観察し，写し取ることによっての仕事を好んだタニクリフであったからである。しかしこの二人のナチュラリストたちは，生涯にわたる家族ぐるみの交際を続け，お互いの仕事を理解しあった貴重な友人であった。

1）『ある田舎びとの暮らし方』（*The Way of a Countryman*, Country Life, 1965）

2）『ガロウェイでの子ども時代』（*A Galloway Childhood*, Heinemann, 1967）

以上の二冊は，いずれもニールの自伝的な作品であり，タニクリフの面目躍如といった魅力的な，ぬくもりのある挿絵が施されている。

3）『鳥撃ちの世界』（*A Fowler's World*, Heinemann, 1968）

4）『急いで耕作を』（*To Speed the Plough*, Heinemann, 1977）

これら二冊にも，それぞれタニクリフの秀逸な挿絵がつけられており，お互いに完全に理解しあった者同士が共同で生み出した仕事となっているのが分かる。

F　アンソロジー・図鑑・事典類への挿絵の仕事

タニクリフはその精緻な静物画の技量を買われて，さまざまなアンソロジー・図鑑・事典類への挿絵の仕事を手がけている。そのうちの主たるものは次のとおりである。

1） *Tales from Ebony* by Harcourt Williams（Putnam, 1934）

2） *A Book of Birds* by Mary Priestley（Victor Gollancs, 1937）

3） *Angling Conclusion* by W. F. R. Reynolds（Faber & Faber, 1947）

4） *Fishing and Flying* by Terence Horseley（Eyre and Sottiswoode, 1947）

5） *The Leaves Return* by E.L. Grant Watson（Country Life, 1947）

6） *British Birds of the Wild Places* by J. Wentworth Day（Blandford Press, 1961）

7） *Wild Flowers of the Countryside* by A. J. Huxley（Blandford Press, 1962）

8） *The Shell Bird Book* by James Fisher（Ebury Press, 1966）

9） *The Horse in the Furrow* by George Ewart Evans（Faber & Faber, 1967）

10） *R.S.P.B. Book of British Birds* by Linda Bennet（Hamlyn, 1978）

タニクリフはまた，『沈黙の春』（*Silent Spring*, 1962）等の著作で，環境破壊の問題を糾弾したアメリカの海洋生物学者レイチェル・カーソン（Rachel Carson, 1907-64）の著作のなかの一冊，『海風の下で』（*Under the Sea-Wind*, 1952）にも，二枚の美しい挿絵をつけている。

同じくアメリカの作家アーネスト・ヘミングウェイ（Ernest, Hemingway, 1899-1961）の名作『老人と海』（*The Old Man and Sea*, 1955）への仕事も興味ふかい。

この本の新版を企画したジョナサン・ケイプ（Jonathan Cape）社は，同じく人気挿絵画家であったR. シェパード（Raymond Sheppard）にも同時に依頼して，どちらか一人の絵を採用する

ことにしていたのだったが，作品を深く解釈しているにもかかわらず，雰囲気を異にする挿絵を交互に入れることを決定し，その結果，タニクリフが16枚，シェパードが18枚の挿絵をつけ，それぞれの魅力を引き立たせるという結果をもたらし，見事に一つの本を完成させるという，きわめて異色な本作りを試みているからである。

– *Under the Sea-Wind*（1952）
by Rachel Carson

Ⅲ　ウェールズ，アングルシー島とタニクリフ

こんなタニクリフが終生の生活の地として選び取ったのがウェールズのアングルシー島の小さい町マストライスであった。この地を得て，よき伴侶ウィニフレッドの全面的な協力のもとに，画家はその生活の全てを，自分の創作世界に燃焼させることができた。

タニクリフは，自らの編み出した独特な手法スクレイパーボードの技法を駆使して，誰の追随をも許さない独特な画家となっていった。この手法を使うことによって，制作に時間がかかり，目にも多大な負担をかける彫りの技法から解放され，まるで空中を飛ぶかの如く，軽々として，白々と明るい雰囲気の絵を制作している。

Ⅰ）　二つの展覧会

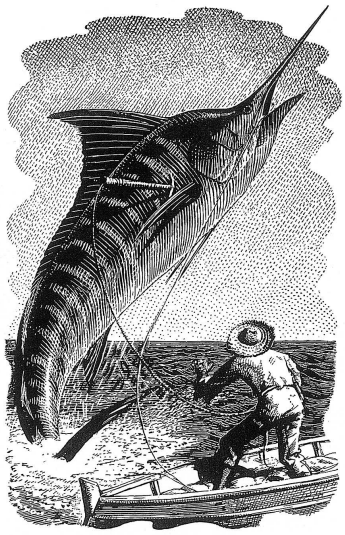
晩年，ウェールズ屈指の画家であり，心を許せる親友でもあったケフィン・ウィリアムズ（Keffin Williams）の熱心な勧めと，推挙により，ロンドンとマンチェスターで，タニクリフの二つの展覧会が開催されている。

ロンドンの王立美術学校のディプロマ・ギャラリーズで，1974年8月3日から9月29日まで，タニクリフの鳥のスケッチと実測図の展覧会が開催された。作品の選択とカタログ作成にあたったのは，著名な鳥類学者のブルース・キャンベル博士（Dr. Bruce Campbell）である。その際に発行されたカタログ，「タニクリフR.A.による鳥類画」（Bird Drwaings by Tunicliffe R.A.）に掲載されたウィリアムズの言葉は，タニクリフの魅力を余すことなく伝えている。

Soon after coming to live in Anglesey the artist wrote and illustraed his well-known book *Shorelands Summer Diary* in which he tells of life on the island throughout the year and shows in brilliant wood-engravings the farms, the people, and the fauna and flora. We in Anglesey were observed and drawn, possibly for the first time, and few of us knew that we were the objects of such affectionate scrutiny. The artist's graphic work is known all over the world and some of the books he has illustrated so well have become classics, like Henry Williamson's *Tarka the Otter* and *Salar the Salmon*. The wood-gravings show him to be the logical inheritor of the skills of another great countryman, Thomas Bewick, and the artists seem to share the same instict.（p. 10）

加えて，ウィリアムズ氏は，この展覧会が後進の者にとって持つ意味を次のように述べる。

・・・Our bird-life is certainly inthretened by the demands of modern times and this is one of the reasons why this amazing record created by the countryman from Cheshire is so important. The drawings are important because they show the art student what real hard work and dedication mean; they are important because of their scientific value, but avobe all they are important because quite unintentionally they are works of art.（p. 11）



－*The Old Man and Sea*（1955）
by Ernest Hemingway

一方，タニクリフによって，第二の故郷として選びとられたウェールズの地では，モスティン・アート・ギャラリー（Mostyn Art Gallery）とウェルシュ・アート・カウンセル（Welsh Arts Council）共催の初めての展覧会が，1980年に開催されている。「野生のいのち―チャールズ・F. タニクリフ R.A.（1901-1979）の芸術」（'Wild Lives, The Art of Charles F. Tunnicliffe R.A, 1901-1979）と名づけられたパンフレットには，同じく，K. ウィリアムズが序文を書いている。その中で彼は，タニクリフの人柄を「単純で，繊細な人，恥ずかしがりやで，感受性豊かな人であり，生活の中に存在する小さなものの大切さを知っている人であった」（'he was a simple and sensible man, a shy man and a sensitive one, a man who knew the importance of the little things in life.'）と語り，タニクリフとウェールズとの幸せな出会いを次のように述べている。

Anglesey gave Charles Tunnicliffe the peace his wok demanded and the ready material for it. Unanbitious and content he just got on with his work, living the life of the artistic loner, a solittary figure with binocular on the cliffs above South Stack or on the Malltraeth, gazing, noting, writing, and then gazing again. Whereever I go in Anglesey, I will always feel that he is somewhere around.

以上見てきた如く，タニクリフの生涯とその仕事は，彼自身がそうありたいと努力していたように，鳥たちの形態や色彩を忠実に写し取るばかりではなく，それを素材として使うことによって，自分の発見した新しい美を創造するという真の芸術家のものであったことが分かる。

そんなタニクリフの特徴を，N. カーサ（Noel Cusa）は『タニクリフの鳥の生活』（*Tunnicliffe's Birdlife*, Orbis Publishing, 1986）の序文で，次のように総括している。

・・・Hermonies of line, shape, tone and colour were sought and studied with an inspired dedication. It is this quality of his work, superimposed on a faithful and acomplished skill in representation of bird and surroundings, that meke Charles Tunnicliffe perhaps the greatest of bird artists.

1969年に妻ウィニフレッドが亡くなったあとも，タニクリフは妹ドロシーの世話を受けながら，ウェールズ，アングルシー島の小村マストライスの海辺の家ショアランズに住み続け，1979

年，心臓発作で亡くなっている。最後の日まで，持病の糖尿病のために衰えてくる視力と戦いながらも，絵筆を持つことは止めなかった。仕事に向かっているときの緊張から解放された画家の周囲には，常に健康で大きな笑い声が響いていたという。

たゆまざる精進の結果手に入れたゆるぎない技術と，確かな観察眼，繰り返し行なわれた綿密な実地踏査の上に築かれた，画家独特の美の創造を，この大柄なチェシャーの田舎者は，大きな喜びのうちに成し遂げている。

Ⅱ） タニクリフ・コレクション　―　スケッチブックと実測図

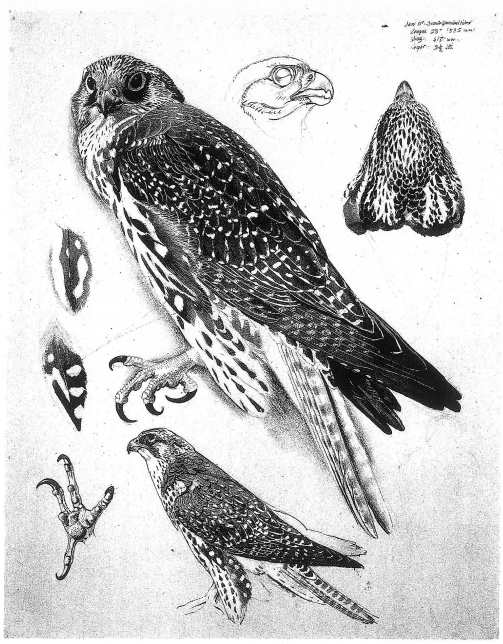
タニクリフが亡くなった後，ショアランズに残された膨大なスケッチブックとメジュアド・ドローイング（実測図）の取得をめぐって，全国的な議論が起こった。画家自らはその所蔵先についてはなんら遺志を示していなかったからである。すでに評価の高かった彼の作品を手に入れようと，アメリカの収集家がクリスティーズ等のオークショナーに働きかけており，イギリス議会も，この貴重な作品の海外流失を阻止するための検討に入った。R. S. P. B.（稀少鳥類保存団体）は，早速購入のための基金募集活動を始めていた。

しかしながら，タニクリフの終の棲家となった，アングルシー島地区協議会の反応も素早いものであった。E.　ショフィールド（Elwyn Schofield）議員をはじめとする，タニクリフの仕事の価値を高く評価していた人々の熱心な努力もあって，今まさにオークションにかけられようとしていたこのコレクションは，1981 年 5 月，アングルシー・バラ・カウンシル（Anglesey Borough Council）が購入することになったのである。レディー・アングルシー（Lady Anglesey），クレドウィン卿（Lord Cledwyn），ケフィン・ウィリアムズ（Sir Kyffin Williams）などの援助を受け，推進運動の執行部長 L. ギブソン（Leon Gibson）が，当時アングルシー島を横断する石油運搬用のパイプ建設のための補償金として，シェル石油会社がアングルシーへ提供した資金を使って，この地に残されていた全作品を，一括購入する手続きがとられたのだった。ナショナル・メモリアル・ヘリテジ・ファンド（National Memorial Heritage Fund）やヴィクトリア&アルバート・ミュージアム（Victoria & Albert Museum）からの支援もあった。

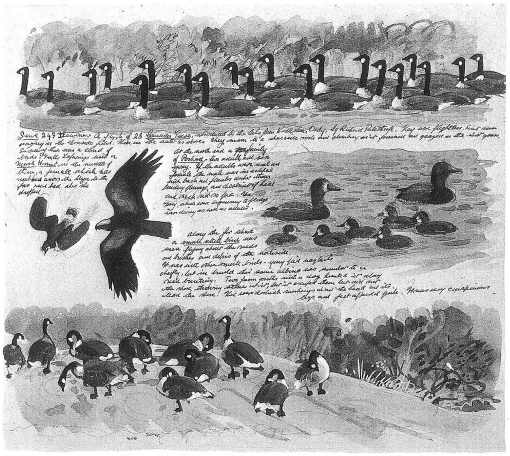
しかしながら，その後 10 年間は，所蔵場所を巡っての議論が活発に行なわれることにもなった。これといって目覚しい文化的財産をもっていないこの地方の所有物としては，そぐわないのではないか，これらを管理し，適切に保存するための専門家の手当てをどうするのか等々の議論が活発に展開されたのである。結局，スァンゲヴニ（Llangefni）に，アングルシー島博物館（Oriel Ynys Môn）という新たな博物館を建設し，スケッチと実測図を，スタジオを含めて，一括管理することになった。1991 年 10 月 25 日，博物館は，女王の臨席のもとに開館し，貴重な作品が収められ，永久保存の手続きが完了したのである。

生態観測の結果から生まれた数々のスケッチは，その息づかいまでも感じさせるほど生き生きした生命の躍動を留めている。それと対照的に，撃ち落されたり，不慮の死を遂げたりして画家の元に届けられた屍をあらゆる角度から観察し，精緻に計測した実測図は，細部にわたった科学的な資料を提供する。この二つの努力の結果は，仕事場であるスタジオの中で繰り返される作業の中で，見事な芸術作品へと結晶されたのである。

アングルシー島博物館に収められたこれらのコレクションは，ウェールズの宝となって，イギリスの田舎出身の偉大な画家タニクリフの創造の秘密を語っている。



'Measured drawings of a juvenile greenland falcon'
– *Sketchbook* (1951)



– *Sketchbook* (1951)

Select Bibliography

A　タニクリフ自身の著作

1　*My Country Book*. The Studio, 1942.
2　*Mereside Chronicle*. Country Life, 1948.
3　*Shorelands Summer Diary*. Collins, 1952.
4　*A Sketchbook of Birds*. Victor, 1979. (with Introduction by Ian Neal).
5　*Shorelands Winter Diary*. RobinsonPublishing, 1992. (with Introduction by Robert Gillmor).
6　*The Peregrine Sketchbook*. Excellent Press, 1996.

B　二人の作家（H.Williamoson と A.Uttley）の作品への挿絵の仕事

1　*Trka the Otter* by Hernry Williamson. G.P. Putnam's Sons, 1932.
2　*Salar the Salmon* by Henry Williamson. Faber & Faber, 1935.
3　*Country Hoard* by Alison Uttley. Faber & Faber, 1943.
4　*Country Child* by Alison Uttley, Faber & Faber, 1945.
5　*The Farm on the Hill* by Alison Uttley, 1949.
6　*Ambush of Young Days* by Allison Uttley. Faber & Faber, 1951.
7　*Secret Places* by Alison Uttley. Faber & Faber, 1972.

C　タニクリフ関係参考書

1　*Portrait of a Country Artist* by Ian Neal. Golancz, 1980.
2　*Tunnicliffe's Countryside* by Ian Neall, Clive Hlloway Books, 1983.
3　*Tunnicliffe's Bird Life* by Noel Cusa, Clive Holloway Books, 1985.

D　展示会関係のカタログとブックレット

1　*Bird Drawings by Tunnicliffe R.A.* Royal Academy of Arts, 1974.
2　*Charles Tunniucliffe R.A.- The Artists's Working Method*. The Isle of Anglesey Borough Council, 1983.
3　*Charles Frederick Tunnicliffe- An Artist's Century*. Oriel Ynys Môn, 2001.